

光陰似箭

中国と「支那」

(宇都宮大学) 伊藤 一彦

2月9日付け『東京新聞』は、「支那」という語の起源はミャンマーとの国境に近い雲南省西部の古代都市「支那城」に由来するという徐作生氏（中国社会科学院、上海『文匯報』編集者）の「新学説」を紹介している。これは華僑向け通信社・中国新聞社電の転電であり、同月11日付け『毎日新聞』も後追い記事を載せている。

徐作生氏によれば、「支那城」は雲南—ミャンマー—インドを結ぶ西南シルクロード沿いにあり、その名がインドに伝わって、紀元前5世紀には内容が固まっていた歴史詩書2編に「CINA」の呼称が見えるという。

古代のインド人は中国をチナと呼んだ。チナがヨーロッパに伝わって、英語のCHINA（チャイナ）、フランス語のCHINE（シーヌ）、ドイツ語のCHINA（ヒーナ）等の語が生まれた。そのチナは中国最初の統一王朝である「秦」（チン CHIN。ピンイン表記ではQIN）に由来するという説がこれまで有力だった。したがって、秦が中国統一をなし遂げた紀元前221年より前にインドで中国を指す語としてチナが用いられていたとすれば、従来の「支那」＝「秦」由来説は否定されることになる。その意味で徐氏の新説は——その当否については今のところ判断できないが——なかなか興味深いものである。

ところで、このニュースを伝えた『毎日新聞』の記事は文末で、「日本では、「支那」という呼称は中国の侮辱的表現とされてきた」と書き、『東京新聞』は、「蔑視性覆る？」という見出しを掲げ、本文で「中国蔑視の言葉とされてきた「支那」と説明している。つまり徐氏の新説が正しいのであれば、「支那」という言葉は中国

の古代都市名から生じたのであるから、それが中国に対する蔑称であるはずがなく、したがって日本で「支那」をそのような言葉と見なし、特に戦後はその使用が忌避されてきたのは間違っていたということになろう。しかし「支那」の起源が「秦」に由来するという従来の通説に従ったとしても、「秦」の語に蔑視性があるわけではないのだから、『東京新聞』の見出しは見当はずれと言わざるをえない。

では「支那」のどこが問題なのか、この点については、竹内好、さねとうけいしゅう、佐藤三郎氏ら多くの方々の論考があり、屋上屋を重ねる嫌いもあるが、上のような新聞記事が書かれたり、最近でも中国を指すのに「中国」より「支那」の方が適切だとする中国専門家の主張が雑誌に発表されたりしている（高島俊男「「支那」は蔑称ではない」、同「「中国」とはどんな意味か」『諸君！』94年12月号、95年2月号）ので、私見を述べてみたい。

まず、「支那」という漢語の起源であるが、唐代に多数の中国人僧侶がインドに留学したが、インド人が中国をチナと呼んでいることを知り、経典を中国語に翻訳する際などに、この語に支那、至那、脂那等の漢字を当てて使用した。しかしその後中国で、「支那」が広く使われることはなかった。

日本では、近代以前には中国を指す呼称はさまざまで、「もろこし」「から」等と呼び、書物では「漢・漢土」「唐・唐土」「中国」「中華」、あるいはまた、その時代の王朝の名称、たとえば宋、明等と書いた。『東大寺要録』（1106年）に「印度支那未嘗見聞矣」、『今昔物語』に「支那国」、空海の詩集『性霊集』に「支那台嶽曼殊廬」の記述が見えるが、その例は少なく、一般的とは言えない。空海は遣唐使に同行して唐に留学した僧侶であり、唐で覚えた「支那」の語を銜学趣味で用いたのであろう。

江戸時代中期に、新井白石の『采覧異言』(1713年)、寺島良庵の『和漢三才図会』(同年)等が「支那」の語を用いているが、これは特殊な学術用語としてのニュアンスが強く、白石、良庵とも中国文化を非常に尊敬していたところから見て、あるいは「支那」の語に敬意をこめていたのかも知れない。

幕末になり、アヘン戦争(1840～42年)で英国に敗れ、それ以後は絶えず欧米列強の侵略に苦しめられている中国の実情が伝わってくると、従来日本人が文化の源流として大きな敬意を払ってきた中国のイメージに変化が生じてくる。ただしそれは幕府当局者や、世界の事情に比較的通じている知識人の範囲にとどまった。この頃から日本において中国を呼ぶのに、従来のものに加え、「清」「清国」とともに「支那」が使われることが増えてくる。日本人の対中イメージの変化と「支那」の使用の拡大とが直接の因果関係にあったとは断言できないが、全く無関係だとも言いきれない。吉田松陰は早くも1855年の有名な書簡で、「取易き朝鮮・満州・支那を切り随え、交易にて魯国に失ふ所は又土地にて鮮満にて償ふべし」と朝鮮、中国に対する侵略を鼓吹している。

明治政府は当初、公文書の中で「清・清国」「支那」の他に「唐国」「漢土」等の語を用いたこともあるが、後2者は間もなく使用されなくなる。新聞も同様で、明治元年(1868年)には「漢土」「唐」「南京」等が散見するが、この年でさえ「支那」の使用が80%に達しており、日本が台湾に出兵した1874年以後、「支那」「清・清国」以外の呼称はほとんど姿を消す。また明治10年代初期までに発行された地理の教科書は、すべて中国を「支那」と記しており、これが国民大衆の間に「支那」の語を広く普及させることになった。かくして明治10年代中期までに、中国の呼称として「支那」が定着することになる。

「支那」の語が幕末に使用され始めた事情はと

もかく、明治期には特別の意味がこめられていた訳ではない。日清戦争(1894～95年)後、中国(清)から日本に留学生が派遣されるようになるが、耳なれない「支那」という言葉に対しては不快を感じずることはあまりなかった。留学生の中で、満州族の清朝の支配に反対し「反満革命」に共鳴する動きが強くなってくると、「支那」という言葉は、清国に非ざる真の中国を呼ぶにふさわしい語として歓迎されるほどでもあった。のちに孫文と並ぶ辛亥革命の指導者となる黄興、宋教仁らは、東京で発行した雑誌に『二十世紀之支那』というタイトルを付けたほどである。

しかし日清戦争の結果、日本人は中国(人)を軽視し、「日本勝った、支那負けた」の歓声と共に、子供までが中国人を「チャンコロ」とか「チャンチャン坊主」と馬鹿にするようになる。そのため中国から来た最初の官費留学生13人中4人がこれに憤慨して帰国したほどであった。

1911年10月、辛亥革命が起こり、中国人は清朝を覆して、翌年アジアで最初の共和国「中華民国」を樹立した。日本政府はこの新政府を「支那共和国」と呼び中国側からのたびたびの不快感表明にもかかわらず、中国との条約においてさえ、この語の使用に固執し続けた。日本政府のこうした態度は、その中国への侵略政策を象徴するものとして中国側に受け取られた。また同時に日本人が中国(人)を「支那(人)」と呼ぶ時、意識するしないにかかわらず、そこに蔑視の念がこめられていることを中国人は強く感じるようになる。

1930年5月下旬、中国政府は、日本政府からの「支那」という文字のある外交文書の受取を拒絶するよう外交部(外務省)に訓令した。その結果、日本政府は同年10月21日の閣議で、中国の正式呼称を「支那」から「中華民国」に変更することを決定した。しかし一般には依然として「支那」が用いられ、政府自身、盧溝橋事件(1937年7月7日)に始まる日中全面戦争を「北支事変」(後に

「支那事変」)と正式に命名した。

「支那」という言葉に対する中国人の不快感は、日本の一部では理解されており、1941年には大政翼賛会が占領地宜撫工作の必要から、「支那」の使用をやめて「中国」を使おうと提唱したこともあったが、日本の敗戦に至るまで大勢は変わらなかった。

日本の敗戦により、中国（中華民国）は戦勝国として日本占領に参画し、1946年6月、日本政府にたいし、「支那」の使用の中止を命令した。これを受けて外務省は同月6日、総務局長岡崎勝男（後の外務大臣）の名で都下の主要新聞社、出版社に「支那の呼称を避けることに関する件」という次のような公文書を送った。

中華民国の国名として支那という文字を使ふことは過去に於いては普通行はれて居た処であるが、其の後之を改められ中国等の語が使はれてゐる処、支那といふ文字は中華民国として極度に嫌ふものであり、現に終戦後同国代表が公式非公式に此の字の使用をやめて貰ひたいとの要求があったので、今後は理屈は抜きにして、先方の嫌がる文字を使はぬ様にしたいと考へ、念のため貴意を得る次第です。

また翌7日には各次官に宛て同様の要望書を提出し、7月3日には文部次官が各大学・専門学校に同名の公文書を送った。

かくして日本政府の公文書からは「支那」の語は姿を消した。一般にはなおしばらく「支那」が使われることがあったが、1949年10月1日に中華人民共和国が成立し、「新中国」の誕生として好意的に評価する人が数を増し、中国に対する蔑視感が薄れるとともに「支那」という言葉が使われることも少なくなっていく。ただし、冷戦の進行にともない、かなり長期にわたり「中共」の語が使用され、その状態が1972年9月の日中国交正常化まで続いたことは記憶に新しい。

今日なお中国を「支那」と呼び、「支那」と書

くのがいけなければ「シナ」と書けばよいと主張する人がある。中国の古代史に造詣の深い学者や作家の中には、中国の総称としては歴史的にも理論的にも「支那」以外の名称はありえないと主張する人さえいる。その主な論拠は次のようなものである。

①中国は王朝の交替が頻繁で国名がたびたび変わったから、総称としては「支那」が最も妥当であり、かつ日本では昔からこう呼んでいる。

②「中国」「中華」は自国を世界の中心とし、他国を夷狄視する尊大な「中華思想」の表れであるから、日本人がそういう語の使用を強制されるいわれはない。

③欧州語のCHINAは問題とせず、その音訳である「支那」のみを問題とするのは理屈にあわない。

④中国は、日本の「中国地方」と紛らわしい。これらに対する反論を以下に述べ、本稿のまとめとする。

①中国人は古来、自分の国の総称として華、夏、中国、中華、中土、中原、中州、中夏等の語を用いてきた。「支那」は記述のように、ごく一部で使われたにすぎない。日本においても同様である。

②日本という国名も、「日の本」とは尊大であるとの論も成り立つ。国の名は人の名と同じように、本（国）人が自由に選ぶ権利があり、他者があれこれ言う筋合いのものではないし、あえて言えば内政干渉にもなりかねない。まして中国人が聞いて不快に感じる言葉をわざわざ使うべきではない。

③CHINAにせよ「支那」にせよ、その言葉自体に問題がある訳ではなく、歴史的にどう使われてきたかが問われる。英語でも、CHINESE（中国人）のかわりにCHINAMANと言えは蔑称であり、この言葉はかつてはさかんに使われたが現在は死後同然である。JAP-

ANESEに対するJAPと考えれば分かりやすい。

- ④「中国」も「中国地方」も長い歴史をもった地名であり、たとえ若干の混乱が生ずるとしても、そのためにどちらか一方の名を他の言葉に置き換えろと言うのは乱暴にすぎる。世界中に同じ名前の土地はいくらでもある。87年7月、中国の外国為替専門銀行である中国銀行の東京支店が営業を開始する際、同一名称の中国銀行（本店、岡山）と混乱が生じる恐れがあり、両方で協議した結果、中国側が

譲歩して日本での記名表示を「中国銀行（バンク・オブ・チャイナ）東京支店」、口頭の場合は「バンク・オブ・チャイナ東京支店」とすることで決着した。このように混乱を避ける余地はあるのである。

なお、「支那」でなく「シナ」と表記すればよいという主張であるが、たとえば「日本」に対する「支那」は、「本部」と「支部」のような上下関係を表しているというように、問題が漢字の字面にあるという認識に立っており、これまで述べた通り、歴史的に過った理解と言うべきである。

『中国研究月報』への投稿について

1. どなたでも自由に投稿できます。
2. 原稿は、中国及びアジア地域に関する論文、研究ノート、資料、書評などで未発表のものに限ります。
3. 原稿の標準枚数は、400字づめ横書き用紙で論文は50枚、書評は8枚、その他は30枚とします。
(ワープロ原稿も可)
4. 原稿には、投稿者の所属および連絡先（住所、電話番号）を付記してください。
5. 採用された原稿は、すべて署名原稿として扱います。
6. 採用された原稿には、当研究所の規定により薄謝を支払います。
7. 掲載された論文などの抜刷を必要とする場合は、実費で作成します。
8. 原稿は採否にかかわらず返却しません。
9. 原稿の送付先、連絡先 〒112 東京都文京区大塚6-22-18

社団法人 中国研究所編集部 TEL 03-3947-8029 FAX 03-3947-8039

本誌の編集方針、企画等に関しては、下記編集委員会が審議しています。

1994年度編集委員会 委員長 並木 頼寿／常務委員：天児 慧、宇野 和夫、大里 浩秋、加々美 光行、
國谷 知史、栗原 純、代田 智明、園田 茂人、
田島 俊雄、田畑 佐和子、丸山 松幸、村田 雄二郎